

『ハワーズ・エンド』とグローバル・イングランド文化の出現

河野真太郎

1 はじめに——モダニズムと交通機関

ヴァージニア・ウルフの『ダロウェイ夫人』では、冒頭の自動車が登場作品の意味論的布置において大きな役割を果たしている。クラリッサがロンドンの街路を歩く場面に登場する、総理大臣が乗るとおぼしき自動車と、空に広告の文字を描く飛行機、この対照は結末部のパーティにおいて、総理大臣その人とセプティマス・スミスの自殺の知らせという対照によってずれをともなって反復されており、それは「田園主義言説」と「都市とモダニティの賛美」という出口なき二律背反を解消せんとする、

しかし時に私が背後に聞くのは
クラクションやエンジンの音

——T・S・エリオット『荒地』

「アーバン・パストラル」の試みと深い関係にある（河野「都市と田園のテクノロジー」^①）。本論では、そのような『ダロウェイ夫人』読解の歴史的パースペクティヴをもう少し広げてみたい。その際に縦糸としたいのは、まさにその自動車を含む交通機関、より具体的には鉄道と自動車の二つである。ただし、これは鉄道や自動車をめぐる文化史的記述ではない。より広汎な歴史的变化の結節点にある現象として、これらの交通機関をめぐる言説を取り扱いたいのである。

その、「より広汎な歴史的变化」を概観しておこう。近年、イアン・ボーコム『場違い』、ジェド・エステイ『縮みゆく島』、

ビーター・カリニー『富裕と怒りの都市』、カート・コウニグズバーガー『小説と動物園』など、「イングリッシュネス」をめぐる研究が注目すべき成果を挙げている。この、研究とともに、カズオ・イシグロ『日の名残り』に始まり、ジュリアン・バーンズ『イングリランド』、イングリランド』などの文学作品においても、イングリッシュネスが再検討に付されていること自体の意味を検討することも必要だが、さしあたっては上記の研究で確定されつつあるかに見える歴史観を確認しておく。エステイの著作はこの歴史観を確定するのに大きな影響力をもったといえるが、それを簡便にまとめれば、こういうことになる。すなわち、イギリス帝国が全体性を担保した十九世紀から盛期モダニズムまで、帝国が瓦解を始め、イングリランドの国民文化への新たな関心が生まれた盛期モダニズムから後期モダニズム、そして戦後の福祉国家・多民族国家化へ、という流れである。エステイは、後期モダニズム、つまり一九三〇年代モダニズムを有意義に読む視点を与えてくれた（河野「メタ・メタカルチャーとモダニズムの緩慢な死」）。レイモンド・ウィリアムズやフレドリック・ジェイムソンが論じたように、「帝国」を認識論的地図の全体性を担保するための不可視の回路としてもっていたモダニズムは、帝国の縮小とともに単に消えたわけではない。三〇年代モダニズムにおける、パジェントの利用（ウルフ

でいえば『幕間』におけるそれ）に注目することで、モダニズムが「イングリッシュネス」との新たな交渉を開始していたこと、これをエステイは示したのである。エステイは、三〇年代モダニズムという、ウィリアムズの言葉では「残滓的なもの」に光を当てることによって、そこに戦後へとつながっていく「勃興的なもの」を見いだしたといえる²²。

本論は、ジェド・エステイが示した歴史観に、一定の修正を加えることを目的とする。簡潔に修正点を述べるならば、帝国文化から国民文化へ、という転回のナラティヴのかたわらで、別の「勃興的なもの」が忘れられてはいないか、という点である。それはすなわち、新たな〈帝国〉である。もちろんここで含意されているのは、ハートとネグリの『〈帝国〉』における意味での〈帝国〉であり、二十世紀イギリス文学・文化を見る際に、それは（ハートとネグリの場合もそうであるように）「アメリカ」の存在と区別が付きがたい場合が多い。本論では混乱を避けるために、これにより一般的な名称「グローバルゼーション」を与えたい。そして、エステイが述べた国民文化への転回と、勃興的グローバルゼーションは、無関係に存在するどころか、熾烈な交渉をくり広げていたことが明らかになるだろう。国民文化とグローバルゼーションとの交渉、その収斂点となる文化現象のひとつが、上に述べた交通機関である。端的には

「鉄道から自動車へ」というシフトであり、それは石炭から石油へのシフトを、そして中東を中心とする二十世紀後半の世界の地政学へのシフトを徴づけているのである。このシフトを最も早く感知し、文学作品へと仕立てあげたのが、E・M・フォースター『ハワーズ・エンド』であった。本論では『ハワーズ・エンド』を検討し、そこにはすでにナショナルなもの（イングリッシュネス）と勃興的グローバルゼーションのあいだの交渉が書き込まれていることを示したいのだが、それは直接的には示し得ず、いくつかの媒介をはさむことになるだろう。最終的には、そのような媒介のひとつとして、カズオ・イシグロの『日の名残り』を検討し、グローバルなものと同ローカルまたはプロヴィンシャルなもののゆくえを概観することによって、『ハワーズ・エンド』が二十世紀後半の状況の系譜にあることを、逆照射して示したい。

2 『ハワーズ・エンド』と自動車の勃興

『ハワーズ・エンド』が出版されたのは一九一〇年である。ヘンリー・フォードが最初のイギリス工場をマンチェスターに開いたのも、一九一〇年である (Stevenson 27)。これが偶然の一致とも言い切れないことは、『ハワーズ・エンド』における

自動車、そしてそれと対照をなす鉄道が、作品の単なる「道具立て」をこえた、構成原理となっていることからわかるかもしれない。実のところ、上記のエステイも大幅に依拠するフレドリック・ジェイムソン「モダニズムと帝国主義」における『ハワーズ・エンド』論も、自動車と鉄道という構成原理を深く扱ったものであった。ジェイムソンの論旨は、『ハワーズ・エンド』における地理的想像の臨界点に現れる「無限 (infinity)」という言葉が、植民地の表象不可能性を徴づけると同時に、「その不可能性に「蓋」をしてしまうような幻想のスクリーンとなっているということだ。そして、その「無限」が付与されるのは、鉄道と並行して走る「北国街道 (Great North Road)」である。

フォースターがこの奇妙な言葉「無限」をくり返し使うにしたがって私たちが気づくのは、この古代の街道と近代の鉄道の換喩的隣接は、後者を表象するための手段であるのみならず、むしろ後者の近代性が圧縮されて、ある第三の現実を明らかにするということだ。それは伝統的でも近代的でもない経験の空間であり、より超越論的ななにか、一種のカント的崇高による、いま・ここに対する圧力なのである。(Jameson 160)

ジェイムソンはこの「超越論的ななか」「カント的崇高」を、表象不可能な植民地の空間へと歴史化してみせるのだが、ここで私が修正を加えたいのは、一見些末な点、すなわち、ジェイムソンが北国街道を「古代的」、鉄道を「近代的」としている点である。北国街道が古い街道であることは間違いないにせよ、こと『ハワーズ・エンド』の意味論的布置においては、街道は、当時勃興しつつあった新たな交通手段、つまり自動車との連想関係にある。そして、作品において自動車の持ち主であるのは、ウィルコックス家である。そして、そのウィルコックス家と対置されるのは、鉄道会社の株^③を保有する、シュレーゲル姉妹だ。

〔マント夫人の〕財産は英国の鉄道に投資されており、彼女は自分の姪にも同じようにするよう、熱心に説いていた。「そうしたら、私たち一緒よ。」マーガレットは、半分おつきあいで数百ポンドをノッティンガム・ダービー鉄道に投資したが……ノッティンガム・ダービー鉄道の株は、英国の鉄道会社にしかできないような悠然たる着実さで下落していった……。今年、ヘレンが成人を迎えると、まったく同じ運命がヘレンを待ちかまえていた……。 (Forster 28)

ジェイムソンが論じる北国街道と鉄道のくだりは、この引用のほんの一頁後である。この小説のオーブニングは、自動車と鉄道という、重層決定されたシンボルを提示しつつ、小説全体の構造を導入することになる。じじつ、シュレーゲル姉妹、とくにマーガレットにとっての鉄道と自動車は、正反対の空間認識の効果を与えるものである。

この巨大なる首都に住んできたほかのおおくの者たちと同様、「マーガレット」はさまざまな鉄道のターミナル駅にまつわる強い感情をいだいていた。……パディントン駅ではコーンウォール全体と、遠く西部地方が待ち構えている感じがしたし、リヴァプール・ストリート駅の傾斜を下れば、沼沢地方と広大なブローズ地方がひろがり、スコットランドはユーストン駅の塔門を通り過ぎた向こう側だし、ウェセックスはウオータールー駅の落ち着いた混沌の向こう側だった……

マーガレットにとって——これで読者が彼女にうたがいの目を向けるようなことがないのを願っているが——キングズ・クロス駅は、いつも無限 (infinity) を思わせた。 (Forster 27)

マーガレットにとってロンドンのターミナル駅は、イングランドに張り巡らされた鉄道網を媒介として、イングランドの全体性を想像させてくれるものである。ここでも登場する「無限」は、その地理的表象の限界点であると同時に、右記のごとく、表象の穴に「蓋」をしてしまうものである。ジェイムソンは、『政治的無意識』において、全体性を想像的に成立させる「包摂の戦略」と、それに異化効果を加え、全体性を掘り崩す「美学化の戦略」の二つを指摘しているが、この二つは表裏一体なわけである。ここでは、二段落目に「語り手」がしゃしゃり出て、マーガレットの「無限」にアイロニカルな距離を取るという巧妙な戦略によって、この「無限」が包摂なのか美学化なのか、という問題が、括弧に入れられている。しかるに、自動車による移動の経験は、マーガレットにとってはジェイムソンの言う意味での美学化のモメントとなる。以下は、マーガレットがハワーズ・エンド邸からロンドンのシュレーゲル家の住まいであるウィッカム・ブレイスへ、自動車で移動する場面である。

ふたたび、「マーガレット」は空間の感覚をうしなった。ふたたび、木々、家並み、ひとびと、動物たち、丘陵はひとつかたまりの薄汚れた物体へとまざりあい、ふくらんで、すると彼女はウィッカム・ブレイスに着いていた。

……彼女はあらゆる地上の美の基礎である、空間の感覚をとりもどした。そして彼女は、ハワーズ・エンド邸を出発点に、イングランドを実感しようところみた。それはできなかった——わたしたちがころみても、ヴィジョンというものには到達できないのだ。ころみることによって到達できるかもしれないとしても。しかし予想もしない、この島への愛が彼女のうちに目覚め、此岸を肉の喜びと、彼岸を理解不能なもの、結びつけた。(Forster 204)

自動車での移動の経験は、鉄道網が保証してくれたイングランドの全体性を崩壊させてしまう。そこでマーガレットが訴える包摂の戦略は、「愛」である。この愛によって、マーガレットは、認知可能な現象世界（此岸）と、不可知の本質（彼岸）の区分を再構築し、彼女の「認知地図」を修復する。こう見ると、こと鉄道に関してジェイムソンの議論は正しいことが分かる。

それでは、自動車についてはどうだろうか。自動車は、右記のごとく、既成の認知地図を揺るがす美学化の契機として「評価」されるべきなのか。それとも、自動車の形象を一気に歴史化し、たとえばジュデイス・ワイスマンやアンドリュース・タッカーのごとく、自動車とその持ち主であるウィルコックス家の男たちを、「帝国主義」に結びつけるべきか。ここでもなすべき

は、そのいずれでもなく、『政治的無意識』の方法に従って、鉄道と自動車という個別的対象を、まずは共時的イデオロギー素として取り出し、しかるのちにそれを歴史（生産様式）にさし向けることである。自動車と帝国主義（もしくは産業主義）、ハワーズ・エンドと英国性（田園）との連想は、イデオロギー素の特定でしかない。だとすれば、これらの対立的対象は作品の「包摂の戦略」にほかならないのであり、問うべきはそれによって排除される「歴史」は何か、ということになる。それは、作品がイデオロギー素のレヴェルでの二律背反によっていかなる現実の矛盾を隠しているか、という問いなのであり、煎じつめれば、以下の一節の解釈を左右する問題となるであろう。結末でのマーガレットとヘレンの会話には、スプロールするロンドンと、それによって消滅するかもしれない田園イングリッシュの象徴、ハワーズ・エンド邸にまつわる不安が表明される。

「これがずっとつづくといいわね」とヘレンは、うわの空で言った。

「そうね。ときどき、奇妙だけど、ハワーズ・エンドは私たちのものって感じがするの。」

「それにしても、ロンドンが忍び寄ってきてるわ。」

彼女は牧草地のほうを指差した。八つか九つの牧草地がひ

ろがっていたが、そのむこうには、赤錆が見えた。

「最近はあるが、サリーや、ニューハンプシャーでも目につくのよ」とヘレンはつづけた。「パーベック丘陵から見えるわ。でもロンドンはほかのなにかの一部でしかないのじゃないかしら。生が、世界中で溶け去ってしまおうとしている。」(Forster 329)

ヘレンが口にする「ほかのなにか」とは何か。そこには、複数の解釈の水準がありうる。ひとつは、右に述べた、作品の構造内でのイデオロギー素の連想関係で読む水準であり、もうひとつの水準としては、そのような、作品による包摂の戦略によって排除されたものとして、「ほかのなにか」を読むという水準である。

以下、本論ではまず「田舎と都会」という媒介項をはさむことでこの作品のイデオロギー素を特定し、それを同時代の田園保存言説に照らしあわせることで、ひとつめの段階の読みから何が排除されているのかを論じたい。

3 田園と自動車

この小説は、一九〇九年に出版されたC・G・F・マスター

マン『イングランドの状況』とその問題圏を共有する、都市のスプロールと田園の荒廃を嘆く、田園保存言説の一例ともとれる。そのような読解によれば、先に引用した「赤錆」や、忍び寄る「ロンドン」は、田園を破壊する産業化・都市化（もしくは郊外化）の波だということになり、「ほかのなにか」とはそのような時代の趨勢の全体だ、ということになる。そしてその際、自動車という形象は産業化や都市化との連想関係におかれる。事実、『ハワーズ・エンド』の自動車は、埃を巻き上げ、排気ガスをまきちらし、沿道の農村に交通事故の危険をもたらす存在である。

〔ロンドンの〕都市そのものが、彼らの生活を象徴するように、たえない流動状態にあって押しては引き、その浅瀬はさらにひろがってサリーの丘に打ち寄せ、ハートフォードシャーの草地を洗った……。そして月を重ねるごとに道路はガソリンの臭いが強まり、渡るのがだんだん難しくなり、人間はおたがいの言っていることを聞きとるのが困難になり、空気は吸えなくなり、空を見ることが減っていた。(Forster 92)

これ以外にも、村の労働者たちを砂埃におしつづんでしまうウィルコックス家の自動車(34)、村の飼い犬を轢いてしまうと

いう事件(Chapter XV)など、自動車は「イングランドの平穏な田園」を破壊するものとしての性質を付与されているように読める。

ここから予想されるのは、産業化された現在を嘆き、過去に存在したと想定される「有機体的社会」への回帰を訴える、おなじみの感情構造である。じじつ、この感情構造にしたがって、『ハワーズ・エンド』の象徴体系を読むことは十分可能であろう。いっぽうに、ロンドンの「流動」^{フロー}とその流出(郊外のスプロール)、それと結びつけられる自動車の形象があり、もういっぽうにはハワーズ・エンド邸が象徴するイングランド性の「精神」があり、それと、鉄道網が想像可能にするイングランドの地理的全体性が重ねあわされる。登場人物の観点からすると、前者は実務的な植民地経営者であるウィルコックス家の男たち、そして彼ら資本家に搾取されながらも、「イングランドの状況」の絵図を完成させるという意味ではコインの裏側ともいえるレナード・バストであり、後者はほかならぬルース・ウィルコックス、そして彼女とハワーズ・エンド邸の精神の相続人たるマーガレット・シュレーゲルである。これらすべての、田舎と都会、そして階級の分断が、「田園イングランドを象徴するハワーズ・エンド邸で遊ぶ、ヘレンとレナードの子供」という形象によって“connect”されてくる。

以上はしかし、かなり選択的な読みである。『ハワーズ・エンド』の包摂の戦略はより巧妙である。一言で述べれば、ハワーズ・エンド邸は疎外された都会ロンドンに對置される田園の理想ではなく、すでに失われた田園の理想と、ロンドンとを結びつけるための媒介項なのである。『ハワーズ・エンド』の、(文学史的な流れを考えれば) 奇妙なまでに前面に出ては「意見」を述べる語り手は、作品のイデオロギー素の、アイロニーをつうじた操作のエージェントだといえるが、その語り手が、先に述べたイギリスの保守的感情構造、つまり有機体的社会の感情構造に対して自覚的であり、それは「ヴィクトリア朝的」だと述べているのであってみれば(116)、読者は前段落のような読みをはじめから禁じられているともいえるのだ。ハワーズ・エンド邸は事実、田舎や田園に属するわけではなく、「田舎だというわけでもなければ、街でもない」(380)場所に位置している。またさらには、レナード・バストがシュレーゲル姉妹に語って聞かせる、ロマン主義的な「逍遙」と、その結末の「鉛色」の空のエピソードもまた、有機体的な田園の理想をアイロニーの対象としている(Chapter XIV)。しかし、ハワーズ・エンドが媒介項であるというのは誤解を招く表現であろう。それは、作品が解決できない矛盾の想像的解決をもたらす、文字通り魔術的(地霊の)場所なのである。そうだとすれば問う

べき問題は、その矛盾とは何か、ということになるだろう。その問いの答えの半分はすでに示唆されている。端的に言えば、それは「田舎と都会」の感情構造を可能にする歴史的條件の消失である。これは言い換えれば、一定の認知地図作成の不調ということであるが、ここで私たちは、一巡りしてジェイムソンの議論に帰着しているのかというところではない。作品は、「無限」による包摂の戦略そのものにアイロニカルな距離をとっている。先の引用で、マーガレットが「無限」を思考する際に、すかさず語り手が介入するのはそのためである。また、「見えないものの見えるものに対する優越」に耽溺するマーガレットに対してヘレンが書き送る警告(119)も、作品がこの「無限」に対して、ジェイムソンが論じるよりも多少なりともアイロニカルであることを示している。であれば、「無限」は、作品のジレンマを解消するための崇高なものではなく、解消されるべきジレンマそのものの構成要素だと考えなければならぬ。冒頭に述べた、『ダロウエイ夫人』におけるアーバン・パストラルの戦略は、まさにそのようなジレンマの解消を目指したものであった。それは都市の近代性を否定することなく、かつパストラル的なものを都市空間の内部にとりもどそうとする試みだったのだから。『ハワーズ・エンド』の場合、軸となる空間は都市ではなく、郊外化の波に飲み込まれつつあるハワー

ズ・エンド邸である。したがって、『ハワーズ・エンド』のプロジェクトは、「郊外のバストラル化」と定義されるであろう。その意味で、ビーター・J・カリニーが、『ハワーズ・エンド』を論じるに際して、エベネザー・ハワードの田園都市構想を参照したのは適切である⁴⁾。ハワードが田園都市に託した「都会と田園の結婚」のヴィジョンは、都市のモダニティを肯定しつつ、それを郊外の空間において田園化しようというもののからだ。ただし、デイヴィッド・マットレスが説得的に論じているように、この「田園化」とはそれ自体、近代のテクノロジーを駆使したものである。

本論では、『ハワーズ・エンド』において問題となった自動車の形象に関係の深い田園主義言説をとりあげてみたい。二十世紀前半の田園保存言説と運動についての重要人物といえはクラフ・ウィリアムズ・エリスであり、彼が設立者のひとりとなったのが、一九二六年に設立されたイングランド田園保存キャンペーン（現イングランド田園保存協会）であるが、そのウィリアムズ・エリスが序文を書いている、ハリー・ピーチとノエル・キャリントン編『地の面』（一九三〇年）という書物がある。なぜ『ハワーズ・エンド』から二十年の歳月が経ったこの書物を取りあげるのかについて付言しておく必要があるだろう。田園保存言説における自動車の位置づけは、この二十年間で大

きく転換しているように見える。たとえばそれが明らかなのは、「イングランドの風景」再発見の紀行ものとしてバストセラールとなったH・V・モートン『イングランドを求めて』（一九二七年）であろうか。自動車旅行でイングランドの田舎を再発見するこの書物の序文でモートンは、自動車の普及によって「以前の世代よりもおおくの人びとが、ほんとうの田舎を初めて目にしているのだ」と述べる（Morton ix）。自動車をもってすれば（鉄道とは違って）道路のあるところならどこにでも行くことができ、これまでアクセスできなかったイングランドの風景を見ることができると。ここでは自動車は、田園主義言説にとって肯定的なものとして姿をあらわしているのだ。これと比較したときに、『ハワーズ・エンド』における自動車表象は、一見正反對のように見える。つまり、田園を破壊する近代の悪。しかしそれが作品の構造内におけるイデオロギー素のひとつではないことは述べた通りだ。『ハワーズ・エンド』は「郊外のバストラル化」を目指している、というテーゼが正しく、そのバストラル化が単純な過去への回帰ではなく、近代性とテクノロジーを駆使したバストラル化であるのなら、二〇年代から三〇年代にかけての、モートンに見たような自動車観の系譜に、『ハワーズ・エンド』はあるのではないか、という可能性が頭をもたげる。逆にいえば、『ハワーズ・エンド』においてはか

すかに勃興的でしかなかったものを、『地の面』によりはつきりした形で見いだせるのではないか。

さて、そのような観点で『地の面』を見てみよう。『地の面』は、道路、駅、工場など、さまざまなテーマに従って、田園風景の嘆かわしい現状とあるべき姿を、多くの写真をもちいて訴える書物である（ちなみに写真の多くはイングランド田園保存キャンペーン所蔵のものである）。そのテーマのひとつが「ガソリンスタンド」なのである。まずは図版1の上の写真をご覧いただきたい。ごみごみとしたガソリンスタンドの下には、「シエイクスピアの里、ケニルワースへの入り口」とある。ここまでは、先述の保守的田園保存言説そのものである。イングランド的なものを象徴するシエイクスピアの里の風景を破壊するガソリンスタンド、というわけだ。しかし、このガソリンスタンドの章にかぎらず、『地の面』の特徴となっているのは、「あるべき姿」の写真群である。どの章においても、田園風景を破壊しない、理想的な建築物とされるものは、けっして伝統的な建築ではない。『地の面』はむしろ、機能性を重視した、モダンイズム建築的な簡素さを称揚する。たとえば図版2の上下の写真を比べるとよい。上は「目的への適合」で、下は「ピクチャレスク」だとされている。上のガソリンスタンドは、「何の模倣というわけでもないが、その描く線はじつに美しい」と評価さ

れ、中国風だか日本風だかわからない下のものは、「レイアウトがいまひとつ」と評価が下がる。

このように、『地の面』は、失われつつあるイングランドの風景を嘆きつつ、しかも近代性を否定しない形でのあらたな「イングランド的風景」を追求している。その意味で、この書物は、郊外のパストラル化をめざす『ハワーズ・エンド』と共通の言説的磁場を共有していることがわかる。しかし、これだけでは『ハワーズ・エンド』のジレンマの真の姿は見えてこない。というのも、これだけではハワーズ・エンド邸という矛盾解決のシンボルを、テクノロジーという別の比喩に置き換えたただだからである。

4 バンガロー、キプロス、スエズ

さて、それではこの二つのテキストが排除する矛盾とはなにか。『地の面』の図版をもう少し検討することで考えてみたい。図版1の上の写真が、「悪い」ガソリンスタンドの例であることは述べた通りである。では、下の写真はどうかだろうか。特にその説明書きに注目したい。『バンガロー』建築だが、非常に整然と配置されているので、美観をそこなうことはない」とある。ここで、微妙な距離感をもって参照されている「バンガ



Two architecturally interesting structures hinting at the immense possibilities before the designers of stations. The upper at Lonsdale Gardens, Cheltenham, the lower at Esher.

図 3



[National Gardens Club]



[National Gardens Club]

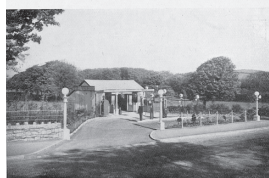
Fitness for purpose versus the picturesque. The upper (at Dover, Kent) imitates nothing yet achieves real beauty of line. The lower (Beckenham, Kent) a style falling between a pagoda and a half-timbered manner, only detracts from an excellent layout.

図 2



[Photo. C.P.R.E.]

This is at the entrance of Kenilworth, in Shakespeare's country.



[National Gardens Club]

A station of about the same size as that above, a "hampulous" structure, yet so tidily set out that it is no disfigurement. Millbrook, Barrow.

図 1

ロー建築」とはなんであろうか。アンソニー・D・キングはその浩瀚なバンガロー文化史で、もともとインドのベンガル地方の農民の住居であったバンガローが、西洋の植民者に採用されさらにはグローバルな建築様式として広まっていたことを示している。キングによれば、イギリスをはじめとする英語圏の諸国では、第一次世界大戦前後に、このバンガロー建築が住居として爆発的に増加した。その要因は「郊外化」であり、その郊外化の条件となりつつ、同時に郊外化によって普及したものが自動車である。キングは、バンガローという建築様式が、資本主義の世界経済化、グローバル化という建築様式が、グローバルな「郊外化」＝モータライゼーションともなう、広まったことを跡づけているのである。そのようなバンガロー建築が、図版1にあるように、あらたな「イングランド的風景」の保存のために推奨されること、しかもその推奨には一定のためらい（『バンガロー建築』だが）がともなわれていること、ここには、ナショナルなものの再編とグローバルなものの圧力のあいだの交渉の姿が見える。

そのような視点で、図版の写真をすべて眺めてみると、ここに展開されている「風景」の意味が明らかになる。さまざまな様式が混淆したこれらのガソリンスタンドの風景は、ほとんど「万国博覧会」とでも呼びたくなるかもしれない。しかし、こ

の風景は、ナショナルな（もしくはエスニックな）諸文化を展示する、帝国主義のイヴェントとしての万国博覧会とは厳密に異質なものである。これらは、あらたなイングリランド的風景として提示されているのだから。ここには、郊外化＝モータライゼーション＝グローバルイゼーションという要素と、帝国主義の残滓と新たなイングリッシュネスという要素がせめぎあっている。

このような歴史を、『ハワーズ・エンド』に見いだすことができるだろうか。この小説のプロットを展開させる地理的要素は、都市、失われた田園、広がる郊外、そして、ジェイムソンによれば、不可視の植民地であった。ここで私たちは、この最後の要素により具体的な形を与えることができる。それは、キプロスである。キプロスは作品の重要な局面で一度だけ登場する。ヘンリー・ウィルコックスが、レナード・バストの妻ジャッキーと情事をもった場所、それがキプロスなのだ。

すこしずつ、その物語は彼女（「マーガレット」）に語られた。それは非常に簡素な物語であった。時は十年前、場所はキプロスの駐屯地町であった。（213）

このように、キプロスという地名は、ヘンリーが語ったとされ

る物語とおなじくらい簡素に、読者に伝えられるのだが、この地名に、ここまで述べたような歴史を読みこむことは可能だろうか。キプロスは、十六世紀以来オスマン・トルコの支配下であり、トルコ系住民とギリシャ系住民のあいだには軋轢が存在していた（それが二十世紀後半のキプロス問題の火種となる）。そこに、イギリスがからんでくる。イギリスがキプロスに目をつけたのは、一八六九年に完工していたスエズ運河防衛の軍事拠点とするためであった。一八七八年には行政権を獲得、一九一四年に併合、一九二五年には正式の直轄植民地となっている。

残念ながら、鉄道から自動車のへの交通機関の転換、つまり石炭から石油へのエネルギー転換をその地理的想像力の枠組みとしながら、ハワーズ・エンド邸という元農場屋敷の象徴によって完結＝閉止をむかえる『ハワーズ・エンド』という作品に一度だけ登場する「キプロス」という地名が、二十世紀の地政学的シフトを、すなわち石油を擁する中東を中心とする地政学へのシフトを、この作品が語っているという直接的証拠になることはない。言えることはといえば、この作品の決定的な転回点となる場所がキプロスである理由はなにかという疑問に、「偶然である」という以上の説得的な答えを与えなければ、キプロスが中東の石油のルートとしてのスエズ運河防衛の要衝であったから、というしかない、ということだけである。もちろん

ん、イギリスがスエズ運河を確保しようとした動機には、帝国主義的な「通商」のルートとしてであり、一九一〇年代にそれをあてはめるのはアナクロニズムだ、と思われるかもしれない。しかし、そうでもないのだ。ダニエル・ヤーギンによる「石油の二十世紀」の叙事詩的歴史書をひもとけば、一九一〇年代こそ、イギリスの石油政策の転換点だったことがわかる。一九一年、いわゆるアガディール事件に端を発するドイツとの海軍軍拡競争のなか、海軍大臣となったウインストン・チャーチルは、一九一二年から一四年の海軍計画により、それまでの石炭船を廃止し、すべての軍艦の動力を石油にした。そして、その石油の供給源は、アングロ・ペルシャ社が採掘するペルシャの石油であった。やがて第一次世界大戦が勃発すると、イギリスはペルシャの石油をめぐって、ペルシャと国境を接するトルコとの闘争をおこなうことになる（Yergin Chapter 8）。それが、キプロスがイギリスにとっての重要な軍事拠点となった文脈なのである。この、キプロスという地名にまわりついた不気味な必然性は、小説の内部においては、それが小説のプロットを転換させる純然たる偶然の場であるという事実によって、むしろ強まるばかりである。

ここですべきことが、この「キプロス」を実証することではないとすれば、ここから一気に二十世紀後半までスキップし、

カズオ・イシグロの『日の名残り』——『ハワーズ・エンド』とおなじく「エステイト・ノヴェル」の伝統に属する作品——に目を移すことには、たんなる目くらまし以上の意味があると信じる。エステイト・ノヴェルの伝統に属すると述べたが、その伝統は、カリニーによれば、イヴリン・ウォーの『ブライズヘッド再訪』——エステイト・ノヴェルの不可能性そのものを主題化した作品——で終焉しているのだから、『日の名残り』はエステイト・ノヴェルというジャンルのバスターイーシュである。バスターイーシュとして、この小説は、エステイト・ノヴェルが不可能になった歴史的條件、つまりアメリカナイゼーションと区別のつきにくいグローバリゼーションにどこまでも意識的である。その存在自体が「イングランド的なもの」のバスターイーシュとも思える主人公バスターイーヴンズが仕える屋敷ダリーントン・ホールの新しき主人が、アメリカ人フアラデーであること、バスターイーヴンズが主人のフォードで（先述のモートンのな）旅すること、バスターイーヴンズがアメリカ的なもの（ジョーク）を身につけようと職業的な決意を固めるというアイロニー。この作品は、二十世紀後半におけるイングリッシュネスとグローバリゼーションとのアイロニカルな関係を、かなり明示的に体现する作品である。それは、出版から四年後の映画版も含め（そして映画版『日の名残り』の一年前の一九九二年に公開さ

れた映画版『ハワーズ・エンド』も含め)、一九八〇年代から九〇年代に興隆した「ヘリテージもの」の重要な一角をなしている。ヘリテージ映画もしくはひろくヘリテージものの隆盛は、たんなるローカル／プロヴィンシャルなもの、もしくはナショナルなものの再興では語れない。それはグローバル化の構成的部分として考えられるべきだろう。グローバル化の力であるなら、文化市場は成立しなくなるのだ。それは差異を要求するのである。初期作品では「日本」、そして『日の名残り』では「英国」を利用するイシグロは、そこにどこまでも敏感であった。

そのような『日の名残り』には、本論にとって非常に興味深い欠落がある。これについてはジョン・サザーランドが指摘するところであるが、その欠落とはほかならぬ「スエズ」である。『日の名残り』の語りの「現在」は一九五六年。ステイヴァンズはガス、欠により、とある村に滞在することになる。泊まった宿のバブで、自分の身分をいつわったステイヴァンズは、かつて外交にもかかわりをもった貴族として村の人びとの政治談議に巻き込まれる。ところが、そこで、当時最大の政治問題であったはずのスエズ戦争が語られることはない。この欠落を、かつてヒトラーに対する融和政策に与し、そのため戦後に批判をうけた保守党の主人ダーリントン卿の記憶を抑圧しようとする、

「信用のおけない」語り手ステイヴァンズが、その再演とでもいうべきスエズ戦争において「独裁者」(ナセル)に対して強硬策がとられていることを、(たとえそこで話題になったとしても)あえて語らなかったという解釈によって説明することも、たしかに可能ではある。たとえその解釈が正しいとしても、残る事実は、『日の名残り』(もしくはステイヴァンズの語り)が、グローバルな地政学を中心たる中東を排除しているということだ。この排除は、先に示唆したように、『日の名残り』という作品自体が、グローバルな文化市場においてイングリッシュネスを商品化していることと表裏一体なのである。このことと、冒頭に述べたイングリッシュネス研究の隆盛とのあいだの共犯関係も興味ぶかい話題であるが、ここでは示唆にとどめておく。

この排除と、『ハワーズ・エンド』のキプロスが、遠くつながっているのではないか、これが本論の最後の提案となる。これは相変わらず「実証」になじむテーマではない。すくなくとも言えることは、イデオロギー素の水準で、失われた田園と都市的近代の二律背反を提示し、それをハワーズ・エンド邸の象徴によって解消せんとする『ハワーズ・エンド』の「郊外のパストラル化」プロジェクトの裏面にはどうやら、「郊外のグローバル化」が潜んでいるらしいということであり、郊外を、都市と田舎、近代と反近代、そして諸階級の「問題」として提出

するまさにその行為によって、この作品は勃興的グローバリゼーションを排除しているということだ。それはジェイムソンが論じる植民地のように、このテキストにとっては構造的に不可視なものであり、なおかつ不気味に現前している。そのような不可視の現前がテキストに現れるとすれば、それは比喩の限界という形を取るだろう。ジェイムソンはそれを「文体」と名づけた。「無限」は象徴ではない。それは「象徴」も含めたレット

リックが破たんする地点を指し示す、症候なのである。ここでは、ヘレンの「ほかのなにか」という言葉に比喩の限界を見いだそう。「ロンドンがほかのなにかである」という陳述は、比喩構造そのもののメタレヴェルにおける言及であり、『ハワーズ・エンド』はそのような言及をもって、ようやく閉じられるのである。

註

(1) 「アーバン・パストラル」はロバート・オルター之言葉である。

(2) レイモンド・ウィリアムズの支配的／残滓的／勃興的なものについては、ウィリアムズの『マルクス主義と文学』を参照。ウィリアムズのテクストを精読すると、ウィリアムズがこれら三つのものをポジティブな実体としてはとらえておらず、相互を規定し合う関係にあり、また不断のプロセスとして構想されていることが分かる。また、残滓的なものが、支配的なものへの「取りこみ」の引力を受けつつ、勃興的なものへの触媒になっているという点は、ウィリアムズの「長い革命」論の

根幹でもある。

(3) この、株の問題、ひいては金融資本主義の問題について、本論では論じることができないが、グローバリゼーションの重要な側面とはトランスナショナルな金融資本の隆盛であり、その勃興形態をこの時代に読みこむことは可能ならずである。もちろん、石油は現物の商品であると同時に金融商品でもあり、その金融商品としての重要性が明確に高まるのは七〇年代のオイル・ショック後である。ちなみに、ロンドン国際石油取引所が設立されたのは一九八〇年であった。資本主義の歴史を金融資本の観点から補完する壮大なところ

(4) みとしてはアリギを、金融資本とポストモダン文化の関係についてはジェイムソンの『カルチュラル・ターン』を参照。

ただし、『ハワーズ・エンド』論にかぎらず、カリニの著書の問題点は、彼が中心におく「階級」の取り扱いにある。たとえば『ハワーズ・エンド』論においては、ハワード流の「都会と田園の結婚」が、ウィルコックス家とシュレーゲル家、そしてレナード・バストという階級の統合と並行関係にあることが示される。カリニは決してそのような「統合」(テキストの包摂の戦略)を真に受けているわけではないが、カリニの著書全体は

いわば、階級の表象がイングリッシュネスを
めぐるジレンマを解消するという図式の系譜
学となっている。二十世紀を通じて階級が
「表象」へと重点を移したことでそれ自体は間

違いではない。しかしその系譜が、新自由主
義と、それと親和性の高いアイデンティティ
主義的な左翼ポリティックスの系譜なのだとす
れば、それはカリニー自身（そして私たち自

身）の現在の系譜なのである。カリニーの著
作に、そのような問題意識は希薄である。

参考文献

- Alter, Robert. *Imagined Cities: Urban Experience and the Language of the Novel*. New Haven: Yale UP, 2005.
- Arrighi, Giovanni. *The Long Twentieth Century: Money, Power, and the Origins of Our Times*. London: Verso, 1994.
- Barnes, Julian. *England, England*. New York: Vintage, 1998.
- Bauman, Ian. *Out of Place: Englishness, Empire, and the Locations of Identity*. Princeton: Princeton UP, 1999.
- Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England*. Princeton: Princeton UP, 2004.
- Hardt, Michael and Antonio Negri. *Empire*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 2000.
- Isiguro, Kazuo. *The Remains of the Day*. London: Faber and Faber, 1989.
- Jameson, Fredric. *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act*. Ithaca: Cornell UP, 1981.
- . *The Cultural Turn: Selected Writings on the Postmodern, 1983-1998*. London: Verso, 1998.
- . "Modernism and Imperialism," 1990. *The Modernist Papers*. London: Verso, 2007. 152-69.
- Kalliney, Peter J. *Cities of Affluence and Anger: A Literary Geography of Modern Englishness*. Charlottesville: U of Virginia P, 2006.
- King, Anthony D. *Bungalow: The Production of a Global Culture*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1995.
- Koenigsberger, Kurt. *The Novel and the Menagerie: Totality, Englishness, and Empire*. Columbus: The Ohio State UP, 2007.
- Masterman, C. G. F. *The Condition of England*. London: Methuen, 1909.
- Matless, David. *Landscape and Englishness*. London: Reaktion Books, 1998.
- Morton, H. V. *In Search of England*. London: Methuen, 2006.
- Peach, Harry, and Noel Carrington, eds. *The Pace of the Land*. London: George Allen and Unwin, 1930.
- Stevenson, John. *British Social History 1914-45*. Harmondsworth: Penguin, 1984.
- Sutherland, John. *Where Was Rebecca Shoi?: Puzzles, Curiosities, and Conundrums in Modern Fiction*. London: Weidenfeld, 1998.
- Thacker, Andrew. "Through Modernity: Forster's Flux." *Moving through Modernity: Space and Geography in Modernism*. Manchester: Manchester UP, 2003. 46-79.
- Weissman, Judith. "Hours End: Gasoline and Goddesses." *Hours End*. Ed. Alistair M. Duckworth. Boston and New York: St Martin's Press, 1997. 432-6.

Williams, Raymond. *Marxism and Literature*.
Oxford: Oxford UP, 1977.
Woolf, Virginia. Mrs. Dalloway. 1925. Oxford:
Blackwell, 1996.
Yergin, Daniel. *The Prize: The Epic Quest for*

Oil, Money and Power. New York: Free Press,
1991.

河野真太郎「メタ・メタカルチャーとモダニズム
の緩慢な死」『ヴァージニア・ウルフ研究』第二
一号（二〇〇八年九月）：六八―八三頁。

——「都市と田園のテクノロジー——歩く『ダ
ロウェイ夫人』」『ヴァージニア・ウルフ研究』
第二四号（二〇〇七年九月）：四六―六〇頁。